
ヒモ男

霜月 梅

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒモ男

【Nコード】

N0957D

【作者名】

霜月 梅

【あらすじ】

浅倉涼。29歳。ヒモ男。女性からの援助だけで生活をしている涼。彼は女性を愛することが出来ないトラウマを抱えていた。

第一話：ヒモ男の涙

「なあなあ、幸子待ってくれよ。」

やばいこのままでは一番の金づるに捨てられてしまう。

俺は生活が掛かっている為、かなり焦っていた。

「涼はいつもそうじゃない。私のこと金づる位にしか思っていないでしょ？」

凶星な幸子の言葉に俺はドキツとしたが、そんな事はおくびにも出さず、いきなりお願いしますだあゝモードから、怒りを抑えながら悲しんでる男モードへシフトチェンジした。

「幸子、それ本気で言ってるの？そんな風に思われてたなんて・・・」

俺はひとすじ涙を流しながら言った。

「由香里のことは悪いと思ってるよ。お前の友達なのに手を出したりして。でも、一時の気の迷いなんだよ。」

由香里は事務員で給料はしれてる。切るとしたら由香里だ。

幸子は付き合いも長いし、何よりキャリアウーマンでほとんど逢わなくて済むのに給料もいい。

幸子を切るわけには行かない。

「涼・・・ごめん。私・・・言いすぎたわ。」

幸子が申し訳無さそうに俺の頬の涙を指で拭う。

『よしっ！』

俺は心の中でガッツポーズをとる。

涙は女の武器とか何とか昔から言われてるけど、そんなの男女差別だ。涙は男の武器でも有る。

ただ、男は武器をやたらめったら出さない。だからこそ効果が有るのだ。

「涼の涙初めて見たわ。傷つけてごめんなさい。」

幸子は俺の身体を抱きしめながら耳元で更に謝った。

「分かってくれたら良いんだ。幸子愛してるよ。」

幸子を抱きしめながらキスをするベツドルームまでお姫様抱っこをする。

女はこのお姫様抱っこに弱い。

これでたつぷり時間を掛けて愛撫すれば、幸子は又今月も機嫌を損ねることなく俺の口座にお金を振り込んでくれる。

夢を追いかけている男を支える女の優越感に浸りながら。

第一話：ヒモ男の涙（後書き）

読んでくださった方ありがとうございます！！

更新は遅いと思いますが、見捨てないでやってください。女性を読
んでると腹が立つかもしれませんが、許してください（ペコリ）

第二話：2人のサチコ

俺は幸子の他にもう1人スポンサーを確保している。

その女の名前も『サチコ』と言う。

字が佐智子という違いはあるが、呼ぶ分には間違いが無くて良いので非常に便利だ。

『幸子』には俺はプロミュージシャンになるという夢を持っている男。

『佐智子』には弁護士を目指して司法浪人中ということにしてある。

女には与えて欲しい女と与えたがる女と二通りに別れる。

両方のサチコとも与えたがる女だ。

一緒に夢を見せてあげているんだし、身体の方だって十二分に満足させてるのだから安いモンだろう。

幸子は所謂キャリアウーマンで、自分で輸入雑貨と輸入インテリアの店を三店舗経営していて、ネットのショップもやっている。

そのどの店も黒字を出しているという男顔負けのやり手だ。

佐智子はネイルサロンと美容室を経営していてこちらも中々の景気の良さだ。

幸子との付き合いはもう3年程になる。佐智子とは1年くらいだ。

両方とも結婚願望が無いのと仕事が忙しくほとんど逢わなくて良い

のが、俺にはすこぶる都合が良かった。

俺はヒモ男には珍しいタイプかもしれないが、どの女とも同棲はしない。

両方の女にワンルームのマンションを借りてもらいそれを行ったり来たりしている。

電話は携帯しか持たないので、どちらからかかって来ても相手は自分の借りてるマンションに居ると思うだろうし、固定電話と違ってどこに居るかなんて分からないのだから便利で都合の良い時代だ。

電車で三駅ほど離れた町に借りていたら案外、一方の女と歩いていてもう一方の女と鉢合わせするなんて事もほとんど皆無だ。

以前は面白いように女が引つ掛かるので5股をかけたり、アパートも一部屋を借りるだけで居た。

例えば女が鉢合わせして去って行っても、またすぐに次が見つかったりしていたので、余裕をかましていたのだ。

だが、何度か殺されかけるような事があったり、紆余曲折があり年を重ねるに連れ、俺もしんどくなつたので今の方法へと落ち着く事にした。

なんでも欲張ったら負けなのだ。

第二話：2人のサチコ（後書き）

更新遅くてすみません^^；

マイペースで頑張りますので、読んでくださる方は気が向いたときに覗いてくださいね。

第三話：夢

「涼、ねえ、涼だけは私のこと分かってくれるわよね。涼には私が必要で私にも涼が必要なのよ。」

小学校高学年か中学生くらいい俺のことを恋人のように抱擁しながら女が耳元で囁いている。

白くてか細いその女の手が俺のジーンズのファスナーに伸びる。

「うわあああ止めてくれええ!!」

カーテンから朝の日差しが洩れてくる。俺の身体は布団ごと半身を勢いよく上げ、嫌な汗が全身を伝っている。

「ああ。夢か・・・。」

俺は額の汗を手の平で拭うとため息を吐いた。

「あの女の夢久しぶりだな。嫌な夢見だ。」

枕元の目覚まし時計で時間を確認すると、蛍光塗料の塗られた長針と短針が9時半を示していた。

「気分変えにパチンコでも行くか。」

俺は身支度を整えると椅子に掛けてあったレザーのジャケットを羽織り、快晴で過ごし易い世界なんかまるつきり無視しているかのよ
うな騒音のやたらと天井の高い建物へと入っていった。

さっきから「リーチ、リーチ」と繰り返している液晶画面を見るで

も見ないでもなく、俺はタバコを吹かしながら今朝の夢のことを考えていた。

『何で今頃あんな夢見るかなー。いつとき見てなかったのに。』

『もう眠れない日々と精神科に通うのだけは嫌だなあ。絶対に。』

隣の中年の男がトントンと俺の肩を叩いてきた。

男の方を向くと「お兄ちゃん当たってるよ。」男の太い指が俺の台の液晶を指差す。

液晶はもう5ラウンドまで進み、下の受け皿が一杯で台からは玉を抜いてくださいとアナウンスが流れていた。

「やっぱり神様は居るな。うん。」

中年男が教えてくれた当りからどんな箱を増やし、久しぶりの大勝ちを収めて俺は店の自動ドアを開け快晴の世界に出た。

「嫌な事が有ったら、良い事がちゃんと用意されてるんだなあ。」俺は天に向かって両手を合わせた。

手を合わせ空を仰いでいると中学生の頃、墓前に手を合わせていたことをふと思い出した。

一度きりたった一度きりだけ手を合わせて二度と行っていない墓。独りだけ埋葬された孤独な墓。

「あつ……。今日あの女の命日だ……。まあ俺には関係ないけど。」

あの女・・・俺の母親。俺が女のことを信じる事が出来なくなっ
たトラウマの元凶。

第三話：夢（後書き）

更新ホンと遅くてごめんなさい。一ヶ月近く経ってますね（汗）正直、ヒトデに比べると書き辛くて参ってます。

勿論投げ出したりはしませんので、暖かい目で見守ってくださいと助かります。ちょっとお話がダークになってきました。こうなると少し書き易くなるかもしれませんが（謎）

第四話：二つの家

ほんと俺の育った家の環境は今の俺以上にクソだった。

まあ、よくある話かもしれないが親父は無類の女好きで、その程度はほとんど病気と言っても良い程だった。

親父は不動産会社を経営していて、そこそこ景気が良く元々財産も結構あったので、俺は経済的にはかなり恵まれていた。

かなり広い土地に家が2軒立っていて、池を挟んで母屋（本宅）と離れ（別宅）があり、親父は離れにはその時のお気に入りのお金を住まわせていた。

俺があの子の腹の中に入ってる時にも、その時付き合っていた愛人を離れに住まわせ当たり前のようにそっちにはかり通っていた。

あの子は両親が他界していて、あまり身体も丈夫ではない方だった為、頼れるのは親父しか居なく別れることも出来ずに居た。

今思えば可哀想な女だが、同情できないほどの事をあの子は俺に長い期間行ってきた。

最初は所謂、虐待を始めてきた。それは小学校低学年の頃から始まった。

親父が離れに通ったり、外の愛人の家に行った時等に、普段だったら怒らないようにならない悪ふざけを俺がしたら、そんな時は烈火の如く怒り、両頬が腫れ上がるほどに打たれた。

その後、お手伝いが作ってくれた夕飯を俺の分だけ処分して、腹が減って眠れない夜を過ごさなければならなかった。

朝になると、あの女は涙を流しながら俺を抱きしめて謝り、何度も何度も許しを請う。

その姿が可哀想で痛々しくて俺も泣きながら、あの女の背中をさすっていた。

その頃の俺の怒りは親父のほうに向けられており、いそいそと楽しそうに出て行く親父の背中を何度刺してやろうかと思った。

だが、親父は幼い頃から柔道をしており、かなりの腕力と強靱な肉体を持っていた為、雰囲気からして恐ろしく小学生の俺はあまりにも無力だった。

女癖が悪くても子供を可愛がる男というのは沢山居ると思うが、親父は俺に対しても無関心で、ほとんど話すことも無く俺の両頬が腫れていても何も聞く事は無かった。

後々分かった事だが、親父は俺の産まれた後パイプカットをして、愛人には子供が出来ないようにしていた。子供を作らせたのは本妻のあの女だけだった。

それが、親父なりの俺とあの女に対しての愛情と誠意だったのだらう。

第四話：二つの家（後書き）

明けましておめでとうございます。

更新相変わらず遅いですが続けて読んでいただいてる方、本当にありがとうございます。

年が明けてもこのままのペースですがよろしくお願いします^^

第五話：母では無くなる日

俺が小学校6年生になった頃にも親父の病気は治らず、相も変わらず愛人の居る離れの方に足繁く通っていた。

俺はいつの間にかそんな親父の背中に対して殺意も抱かなくなり、あの女の虐待にも慣れてきていた。

そんな変化が無いと言えば無い日常の中で急にその日はやってきた。

冬の寒い雪が降る日、その日も親父は離れに行っていた。雪のせいかやけに静かな夜で、俺の部屋の障子戸が開く音でさえはつきりと響き俺は目を覚ました。

あの女は横になっている俺の布団の中に入り込むと、

「涼、寒いからお母さん身体が冷えちゃって……。一緒に寝てくれる。」

そう言いながら俺の背中に自分の身体をくっ付けてきた。

あの女の温もりと胸の膨らみを背中に感じ、成長期だった俺はその膨らみに母性では無く女を感じた。

その感情に対する罪悪感と密着する母親に少しの恐怖と嫌悪感を感じ、俺は少し身体を離れた。

「涼……。」

少し寂しそうなあの女の声が聴こえ、まるで自分が何か悪いことをしているかのような気持ちになった。

その日は特に何も無く二人で同じ布団に並んで寝ただけだった。

それから、親父が離れに行く日には必ず俺の布団に入ってきて、身体を密着させ時々俺の下腹部へと手を伸ばし愛撫を加えていくようになった。

あの女はいつも泣きながらその行為をしてくる為、俺は怖さや嫌悪を感じつつもその手を払い除けることが出来ずに居た。

障子戸の開く音がするたび憂鬱な気分になり、あの女に同情心は有れど母親に対して抱く信頼は失っていった。

春が来て俺は中学へと進学した。

気候が暖かくなってくると親父は愛人と海外の方へと長旅に出た。

旅行の間、毎日のようにあの女は俺の寢床に入り、俺も当たり前のようになってきたその行為に諦めを感じていた。

「長井さん、今日は雨が激しいし早く上がって頂いて結構よ。」
親父が旅行に行つて二週間が過ぎた頃、雨が朝から夜まで降り続く

日があり、あの女はお手伝いを早く帰らせた。

俺は長雨とあの女と二人きりになることに対して憂鬱な気分になった。

中々寢床に入る気持ちになれない俺は居間でテレビを見ていた。

居間に誰かが近づく足音が聞こえた。

あの女しか居ない。今この家にはあの女と俺の二人きりなのだから。

コーヒーの良い香りがする。

「涼はブラックで良かったわよね？」

居間のテーブルに俺のコーヒーカップをそつと置くとあの女は俺の隣に座った。

自然と身体がビクツとなり俺は少し身体を離れた。

あの女は紅茶にブランデーを入れて飲んで居る。

甘いアルコールの香りがコーヒーの香りに負けじと香ってくる。

あの女は俺に性的なことをする少し前から、アルコールを飲まずには居られなくなったようで、

朝から夜までほぼ切らすことなく、ブランデーを飲み続けていた。

紅茶を飲み終わるとあの女は急に俺に抱きついてきた。

「涼、ねえ、涼だけは私のこと分かってくれるわよね。涼には私が必要で私にも涼が必要なのよ。」

耳元であの女が掠れかかった声で囁く。

白く細い指先で俺のジーンズのファスナーを下ろすと、いつものように愛撫を加え始めた。
涙を流しながら。

俺は哀れみと情でその手を払い除ける事が出来なかった。

あの女が服を脱ぎ、俺の手を持つと自分の乳房へ誘導した時には流石に恐くなり、
俺は手を払った。

「涼……。」

どうしようもないほど悲しさと寂しさを帯びた瞳で俺を見る。

「母さん……。お、俺、怖いよ。母さんが。」

「大丈夫よ。涼。あなたは元々ここに居たのよ。」

あの女は自分の下腹の辺りを愛しそくに撫でる。

「ここに戻るだけ。何も怖い事は無いのよ。」

その日あの女の中に俺は還らされた。

第五話・母では無くなる日（後書き）

ちよつと内容がドロドロしてきましたので、15指定にさせて頂き
ました^^；

第六話：解放の中の呪縛

親父が旅行から帰ってきた日、その日は前の日から長雨で朝になつてもまだ降り続けていた。

あの女と関係を持った日から二週間後、いつもの旅行よりも少し早めに親父は帰ってきた。

あの日からあの女は毎日のように俺に関係を迫った。

俺は親としての信頼を最後の壁を取り払われて、感情を無くし無抵抗にあの女の相手をした。

親父が帰って来た日も二人は裸で、母屋の俺の部屋の布団で眠っていた。

親父が障子を開けても目覚めず、訳の分からない奇声をあげながら親父が俺に殴りかかったところで目が覚めた。

あの女も飛び起き裸のまま親父が俺を殴るのを止めようとしていた。

俺は殴られながら、親父の中にまだこの女に対する愛情が少しでも有る事にほっとしていた。

愛情としてか、物への執着のようなものか分からないが、親父が俺を殴ったのは明らかに嫉妬と言う感情からのものだった。

翌日、あの女は自分の部屋で首を吊って死んだ。

雨が止んでやつと日が差した暖かい陽光の人の死とは似つかわしくない清々しい朝に。

あの女の遺書には俺に対して性的な虐待を行ってきた事、俺は悪くなく自分が全て悪いのだと言う内容の事を震える文字で書いてあった。

親父は遺書を読むと俺に土下座をして謝った。あの親父が子供に土下座をすることが信じられなかった。クソみたいな男でも一応恥や責任は感じられるようだった。

親父はあの女は家の墓には入れない、無縁仏にでもしてやると言った類のことを涙を流しながら俺に言ってきた。

俺はそんな事はどうでも良かった。ただただ終わったんだなと思った。あの女の呪縛のような系から解放されたのだなと思った。

「父さん・・・、墓は別に立ててあげてよ。一応愛してた時もあったんでしょ。」

俺がそういうと親父は嗚咽をあげながら頷いた。

親父は俺の言ったとおり、別にあの女の墓を立てた。俺は一度だけ墓参りに行った。

あの女が自殺して埋葬されてからも夜は眠れない事が多く、廊下

の軋む幻聴が聞こえたりと俺の精神状態はかなり不安定だった。

精神科医のカウンセラーや催眠療法などを受けて、高校を卒業する頃には大分まともな生活が送れるようにはなったが、女に対しての俺の抱く感情はかなり捻じ曲がったものになっていた。

「あなたには心があるの？」

「良いのは顔と身体だけだった。」

「地獄に落ちろ。」

等等、俺は女と別れるたびに罵声を浴びさせられながら、また新たな貢いでくれる女へと花を渡る蝶の様に移動し生活していた。

女を信じることは出来なかった。女に限らず全ての人間が信じられず、自分さえも信じられずに生きていた。

第六話：解放の中の呪縛（後書き）

すごく更新遅れてしまいました。完璧行き詰ってました。
何とか書きましたが、これからどう進めるかまた思案中です（汗）

第七話：割切り

昼頃まで惰眠を貪っている俺に携帯の着信音が喝を入れるように鳴り響く。

携帯のディスプレイには『幸子』と表示されている。

「涼、おはよう。寝てたかしら？」

受話器の向こうから、少し落ち着いた冷たさを感じさせるような幸子の声が聞こえる。

「ああ。今起きたところ。」

着信音で起きたのだから嘘ではない。

「ちよつと話したいことが有るの。今から会える？」

女からの『話したい事が有る』という言葉はあまり良いニュアンスは含まれて居ない事が多く、俺は少し憂鬱な気持ちになった。

「いいよ。マンションに来て。幸子が来るまでに身支度済ませるから。」

今日は運良く幸子の借りてくれてる方のマンションに居たから焦る事も無い。

「じゃあ今から出るわ。」

そう言つと幸子はすぐに電話を切った。

「別れ話か・・・？浮気がばれたか・・・？」

俺はベッドから降りると身支度をしながら一人こちた。

『ピンポーン』

幸子からの電話の後、四十分後に鳴ったインターホン。

インターホンの受話器をあげ無くても幸子であることは分かったが一応俺は受話器をあげた。

来訪者はやはり幸子で玄関を開けると特に怒っている様でも悲しんでいる様でもない表情をした幸子が立っていた。

この時の幸子の表情は何か覚悟を決めているような意志を持った無表情だった。

幸子を居間に通しコーヒーを出すと俺の方から口火を切った。

「んで、話して何？」

俺はあくまで軽い感じに切り出した。

「ん……。涼、私ね全部知ってるの。佐智子さんのこともミュージションになる努力なんて何一つしてないことも。」

自分が悪いことでもしているかのように困った顔をしながら幸子は俺の事を見ずに話しを続ける。

「それで、佐智子さんに会って話しをしたら、彼女も知ってたわ何もかも。」

俺はどう対処するのが一番良いか分からず黙って話を聞いていた。

「佐智子さんは男の存在とセックスは生きるのに必要だけど、恋人や配偶者は要らないからあなたはちょうど良い存在なんだって言った。」

俺は少し驚いたが、その方が俺にとっても好都合だと思った。

何もかも分かかっていて割り切って付き合ってくれるなんてこんなに都合の良いことは無い。

でも、幸子の言いたい事の意図がイマイチ掴めない。

「で、幸子はどうしたい訳？幸子も割り切って付き合える俺の存在って便利なんですよ？」

意地の悪い言い方かもしれないと思ったが、本当にそうなんだろうと思った俺はそう言っていると幸子の方へと視線をやった。

第七話：割切り（後書き）

更新70日以上も経ってしまいすみません。

色々と心が忙しく、小説を書く余裕がありませんでした。

元々筆の遅い性質ですが、暖かく見守っていただけると嬉しいです

^^

第八話：幸子の気持ち

幸子は和風な造りの大きな門の前に立っていた。

木で出来た立派な表札には『浅倉』と彫られている。

事前に訪問の連絡はしていたが、インターホンを押す指が震える。

インターホンの応対はお手伝いの女性が受け、門まで迎えに来てその屋敷の主の所まで案内してくれた。

廊下を歩きながら屋敷の細部を見渡すと、お金の掛かった造りであるのは、目の肥えた幸子にはすぐに分かった。

応接室に通されると、幸子は年季の入った外国製のソファに軽く腰を下ろした。

しばらくすると和服姿の恰幅の良い初老の男性が部屋へと入ってきた。

「お待たせしてすみませんね。お嬢さん。」

柔らかい視線を幸子に投げかけるその目元はやはり親子、涼にそっくりだと幸子は思った。

「あの……。」

幸子が言い出しにくく話を切り出そうとすると、涼の父は右手で

それを制するようにし、髭を蓄えた口元を静かに動かし始めた。

「お嬢さ・・・おお、幸子さんだったね。」

「電話でお名前を伺ってるのにずっとお嬢さんでは失礼だ。」

思い出したように涼の父はそう言うと、幸子に微笑みかける。

興信所を使い涼の事を調べた時に、涼の過去の事も色々知る事が出来た。

その報告を受けた時、あまりのショックに幸子は気が付くと受話器を握り、涼の実家へと連絡を取っていた。

「幸子さんは、本当に涼の事を思ってくださってるんですね。」

「彼はどう思ってるのか分かりませんが、私が彼を思う気持ちは本物です。」

幸子は真っ直ぐな瞳で、涼の父を見つめる。

「ですから、今日伺ったのも好奇心やその類の下卑た考えではなく、彼の事を知り手を差し伸べられるならそうしたい。ただ、その思いだけで伺いました。」

彼は幸子の言葉を聞くと、何度も深く頷き昔の話をゆっくりと話し始めた。

屋敷を出る頃には、日が傾きかけて幸子の白いスカートを夕陽がオレンジに染めていた。

ここ何日かずっと涼の事ばかりを考えていた。涼の父の話を聞き、改めてかなりのショックを受けたが、自分に課せられた使命のようなものを感じ、幸子は夕陽を前に新たに決意を固めていた。

第八話：幸子の気持ち（後書き）

また長らく滞っておりまして。
良かったら読んでください。

最終話：癒し、許し

「涼、あのね・・・私あなたの実家にも行ってお父様に全てのお話を聞かせてもらったの。」

幸子の言葉に俺は固まった。

黙ったままの俺の顔を心配そうに覗きこみ、幸子は話を続けた。

「あなたがどう思ってるのかは分からないけれど、私はあなたのこと本当に愛してるの。」

「佐智子さんのようには割り切れないわ。」

その様な事を時々ため息を洩らしながら話すと、幸子は返事を待つように俺の方を見て黙った。

「なんで・・・俺は誰にも知られなくなかったのに！土足で人の心に入ってくるような真似して欲しくなかった。」

俺はトラウマの原因やあの女とのことを幸子が知っているかと思うと、怒りや羞恥、色々な感情が入り混じり幸子を責めるように叫んだ。

大きな声を出すなんて、幸子と付き合い始めて初めてのことだった。

「涼・・・ごめんなさい。あなたを傷つける気は無かったの。結果はそうなってしまったのかもしれないけれど・・・。」

幸子の大きな目が涙で潤んでいく。

その顔を見て俺は少し冷静さを取り戻した。

「それで、幸子はどうしたいの？」

俺は幸子がこの先どうしたいと思っているのか分からず聞いた。

「私は、あなたを愛してる。あなたの過去も何もかも含めて今のあなたを愛してるわ。」

「だから、あなたの傷を回復させられる立場になれたら良いと思ってる。でも、あなたがそれを望んでないのなら、私はあなたから去るわ。」

幸子は俺の目を真っ直ぐに見つめる。全てを包んで癒してくれそうなその黒目の強さに俺は全てを委ねたくなった。

「なあ、幸子俺はこんな時でも、幸子が居なくなったらまず最初に困るのは金のことだと思ってる。そこまで病んでる男なんだよ。」

心とはうらはらに俺の口からはわざと幸子を傷つけ遠ざけさせる言葉が出て行く。

その瞬間、暖かく柔らかいものに包まれた。

幸子の胸が目の前にある。

座って話をしていた俺を包み込むように幸子が抱きしめてきたのだ。つた。

「涼、もう良いわ。それがあなたの本心から出てる言葉かどうか私には分かるのよ。」

その言葉に答え甘えるように俺は幸子の胸にいつそう深く顔を埋めた。

「幸子、俺は怖いんだ。女が人が。裏切られ傷つけられることが。俺の目からは涙がどんどん溢れた。」

「大丈夫。私はあなたを裏切らない。傷つけない。ずっとそばに居るわ。」

「焦らないで良い。ゆっくり二人で治して行きましょう。あなたが望む限り私はあなたのそばに居るから。」

幸子の唇が俺の涙を吸い取っていく。

俺は幸子に母親を見た。

いつかあの女を許せるときが来るのだろうか・・・

今は分からないけれど、いつか幸子と一緒にあの女の墓参りに行けたら良いなと思った。

< 完 >

最終話：癒し、許し（後書き）

また長く空きました。やっとこ終わりました。

ちよつと終わりの方は中盤の濃さに比べ、あっさりになってしまいました。が、力量不足とスタミナ不足（？）です。

また手を加えるかもしれませんが、良かったら読んでください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0957d/>

ヒモ男

2010年11月16日17時47分発行